AN ENGLISH AND AMERICAN LITERARY CALENDAR

summer

英語歳時記／夏

KENKYUSHA

英語歳時記／夏

AN ENGLISH AND AMERICAN LITERARY CALENDAR

summer

監　修

土居　光知

福原麟太郎

山本　健吉

編　集

成田　成寿

研究社

資料提供
英国大使館広報課
英国旅行協会
角川書店
カナダ政府観光局
キーストン
行田哲夫
国立衛生試験所
地人書館
富成忠夫
藤井幸雄
米国大使館広報課
米国商務省観光局
ワイド・ワールド

図・さし絵
大川アート
佐藤広喜
玉木図版社
山下史人

箱・表紙装幀
増淵聖司

英語歳時記／夏

1968 年 9 月 20 日　初版発行
1969 年 9 月 30 日　再版発行

定価 1400 円

編　者　成田成寿
発行者　小酒井貞一郎
印刷者　小酒井益三郎
発行所　研究社出版株式会社
〒162　東京都新宿区神楽坂 1 の 2
電話 東京 (269) 4521-5 番
振替口座 東京 83761 番

印刷　研究社印刷
美術印刷　大平舎
写真製版　学術写真製版所
製本　新栄社製本
製函　加藤製函所

落丁・乱丁はお取りかえします

はじめに

既刊の『春』の部については 激励やご注意 激励やご注意を、各方面からいただいたことを最初に感謝する。いただ たご注意については、機会あるごとに採り入れ、いっそう充実したものにするよう努がある。

本巻『夏』の部では『春』ンシス同じようにイギリスとアメリカで多少の差がある点などの困難があった。またアメ南部の夏は北部よ春と同じように、各地域で夏でもいろいろの気候上などの差違がある。南部の夏は北部より早く始まり遅くまで続くところがある。また同じ期間で西部特にサンフランシスコなどは、霧の季節で肌寒い。そのような点には、できるだけ注意するようにした。夏 (Summer) は天文学で正式には夏至 (6月22日ころ) で太陽がカニ座 (Cancer) に入るときから、秋分 (9月23日ころ) で、太陽がテンビン座 (Libra) に入るときまでである。だが一般には夏はイギリスの場合には5月半ばから8月の半ばまで、あるいは5, 6, 7, 8月を含むとも解釈されて、いろいろである。イギリスの盛夏 (High Summer) といえば、6月18日ころから9月9日ころまでともいう。北アメリカの場合は比較的はっきりしていて、6, 7, 8月を、ふつうには夏という。そんなふうに多少の違いがあるし、事実、年ごとに多少のずれもある。本巻においては5月のころについては春と夏のまじりあった記述も必然的に生じている。それらを初め、イギリス、アメリカの異同と特質、さらに日本との比較などが、はっきり浮き出れば、しあわせである。本巻ではかならずしも日本の歳時記にとらわれず、イギリス、アメリカの独自のものをとらえるようつとめてある。なお、各項目の配列については便宜上アルファベット順にしてある。そのために、たとえば「時候」などの項で、August (8月) が最初にきて、6月、7月などが後にくるというようなことも生じている。これは多少不自然なようなところもあるが、いろいろ工夫した結果やむをえぬことで、『春』の部と同じ方針にしたものである。したがって「時候」の summer に先ず目を通し、つぎに June, July, August の順にご覧いただくと、英米の夏が一応理解されよう。また、天文や動・植物類の名前などについては、学名などと多少とも違ったところのあることは、いろいろな方々からお教示いただいている。この点については、検討を重ねたが、各ご執筆の方々のご意見を尊重し、また、比較的通俗に流布している形で、そのままにしているところがある。しかし、この点については、最終巻などで、一応全部にわたり正確な学名などもあげることにしてはと考えている。『春』の項では同じ引用が多く出たが、この巻ではできるだけ重複をさけ、そのような場合は少なくなっている。なお本書の内容についてはつぎのような方針を採った。

1. 項目は、時候、天文、地理、生活、行事、動物、植物の7部に分けた。

1. 本巻に収録した項目の総数は 453, 時候 42, 天文 21, 地理 22, 生活 65, 行事 28, 動物 111, 植物 164.
1. 項目のつづりはできるだけ英米の現行の辞書に従い、発音やアクセントについても、日本で慣れている音標文字にしたがったが、その根拠として英米の辞書、発音辞典などを参照した。
1. 邦訳名についてはできるだけ日本で受入れられているもので表記した。
1. 動物、植物の項目での邦訳名は、原語読みの場合を除き、ひらがなで表わし、解説、引用文邦訳ではすべてカタカナにした。
1. 引用はすべて原文とし、かならず訳文を添えた。
1. 引用原文の出典について、単行本および雑誌の場合はイタリック体に、作品集中の1篇もしくはその1部を表題とする場合は引用符でくくった。
1. 各項目の解説の末尾にある｜ ｜の姓は、それぞれ執筆者名を表わす。
1. なお、同一詩句などが、各執筆者によって、くりかえし引用されている場合もある。また、その原文の典拠によって多少つづりの差があることもあるし、訳文に差のあることもあるが、諸家のご意見を尊重した。

本書は、むろん事典的な要素を持つことも当然である。しかし、同時に、読みものとして、面白く、また、どこを読んでも興味あるものとなっていると信じている。

本巻についても、監修の諸先生のご懇切なご注意と多くのご執筆の諸家のなみなみならぬご協力をえたことと、編集の平国，定松両氏が異常な苦心を払い、献身的な努力をはらってくださったことに深謝する。むろん前巻に対して、ご支援をお送りくだされた方には感謝し、そのために編集部がひじょうに勇気づけられたことに対して、再度御礼申し上げる。

本巻では編集者の執筆の項が多いようであるが、これは前巻の場合と同じく、ご執筆をお願いした方々のご都合などで、編集部にもどってきたものであり、また、お願いしてしまったあと補遺的に埋めたりしたものが全部である。また、それらの項については岡田春馬、小林稔両氏にご協力いただいたことを、ここに記して感謝する。なお夏の項が秋になったが、秋冬の項をできるだけ早く刊行したい念願である。

なお、本書に対して熱心なご協力をいただいた大沢実早稲田大学教授のご長逝をいたみ、つつしんで哀悼する。9月14日本書校正中、悲報を聞いた。ご多忙のなかから、ご無理に、たくさんの項目を執筆していただいた。特に日本俳句との比較は独自の興味あるもので、好評であった。続刊するほかの巻にもお原稿が載るはずであるが、最終巻までお見とどけいただけなかったことは残念であり、お心残りではなかったかと思う。いっそう気をつけてご協力、ご期待にそいたい。

1968 年 9 月　　編　　者

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

夏の季節

イギリスの夏

前川俊一

イギリスで夏といえば、普通には5, 6, 7の3ケ月をさすことになっている。このころは日一日と野山の緑があざやかさをまし、hawthorn（サンザシ）をはじめとしてつぎつぎにいろんな花が咲きそろい、一年を通じてもっとも快適な季節である。しかし気温は、イギリスでは秋の部に入っている8月が一番高い。といっても最南部でも8月中に華氏80度（摂氏 26.7度）を越える日は数える程しかない。私が London にいた1954年の9月2日の *Manchester Guardian* 紙に、つぎのような記事が出た。

> Yesterday was the hottest day of the year in many parts of Britain and Western Europe. Among Britain's warmest places, London, with 83 degrees, and Blackpool, with 76 degrees, had their highest temperature since August 12 last year.
>
> 昨日は、ブリテンや西ヨーロッパの大抵の地方では、今年に入って最高の暑さだった。ブリテンを通じて最高の暑さの地点のうち、ロンドンは83度、ブラックプールは76度と、去年の8月12日以来、最高の気温を記録した。

だから、その年の8月は華氏 83度(摂氏 28.3度)を越えた日は一度もなかったことになる。しかし、夏、ことに5月などは、その日その日の気温のあがりさがりが相当に大きいようである。当時の日記を繰ると、5月11日の項に「昨日は気温実に70度、今日はさらに暑い。4, 5日まえまでは街頭で冬オーバに襟巻き姿を見かけたが、今夕 Hyde Park を横切ると、何と Serpentine 池で水泳をたのしんでいる連中がいた」とある。さらに5月17日の項に「昨日、今日と寒さぶりかえし、街頭にまたもや冬オーバ姿を見かける」とある。いずれにしてもイギリスは夏の盛りでも日本にくらべると気温も湿度も低くてはるかにしのぎやすい。街頭で上衣を脱いだすがたもあまり見かけない。だいたい上衣そのものが日本でいえば合服程度のものなのである。大分昔のことだが、ある旧制高校の老教授が若いころ、London 留学中に、6月に入ったので、いち早く日本風の夏服にころもがえをして得意でいたところ、下宿の亭主から 'You are the coolest gentleman in London' と、ほめたのか、ひやかしかわからぬ言葉をかけられたと、御当人の口からきいたことがある。London は、かつての樺太の日露境界線になっていた北緯

50度から1度半も北にあることをわれわれは忘れがちである。当然、夏は日中がむやみに長い。London では Greenwich 標準時の午前4時まえに、もう日が地平線上にのぼり、午後8時すぎにならないと西に沈まない。だから夜は9時半 (Summer Time の10時半) になっても、空のうす明りで新聞がよめるくらいである。そんなわけで、イギリスの良家の子供たちは、まだ外があかるいうちに寝室へとせき立てられ、

. . . does it not seem hard to you,	空が青く晴れわたって
When all the sky is clear and blue,	僕遊びたくってたまらないのに
And I should like so much to play,	昼間(ひる)から、おやすみなさい、なんて
To have to go to bed by day?	君ひどいとは思わない?
	—R. L. Stevenson: *Bed in Summer*

というなげきの声も出るわけである。

イギリスは雨が多いとはよく聞く言葉だが、それはヨーロッパ諸国と比べての話である。年間の降雨量は日本とは比較にならない。しかし London や Oxford を含めたイギリスの東南部地方は7,8月はことに雨が多い。もっとも日本のように2日も3日もしとしと降りつづいたり、風まじりのドシャ降りになることはすくない。朝きれいに晴れわたっているので勇んで外出すると、おひるごろから空模様があやしくなり、午後は雨とか、朝降っているかと思うと午後はからりと晴れる、といったふうに1日中お天気が猫の目のようにかわるのである。そのため、夏の快晴の日も厚ぼったいレーンコートを後生大事に着こんであるいてござるご仁もめずらしくない。

このような好季節のため、5月から7月にかけて London の内外でいろんな行事が催され、王室を中心とする社交界の人々も London につどう。この期間がいわゆる the (London) season である。まず5月の終りか6月のはじめごろに、有名な the Derby がある。それから2週間を置いて Ascot 競馬がはじまる。Derby は1954年には6月2日にあたったが、この日、わずか18才の少年 jockey の騎乗するアメリカ人の持ち馬が優勝をかっさらい、優勝の呼び声の高かった the Queen の持ち馬があえなく8位でやぶれるという大番狂わせがおこった。Epsom をうずめる大観衆がただ茫然としているさまは、その日生れてはじめて競馬場に足ふみ入れた私には、まことに印象深かった。Derby の場合も、Ascot の場合も、臨席の the Queen をはじめ、上流婦人連のその日のよそおい、数奇をこらした hats など、翌日の諸新聞に、幾枚もの写真入りでこまごまと報道されていた。われわれが幼時、王子さま王女さまの物語に読みふけるのに似かよった気持で、物語ならぬ現実の王室や社交界のはなやかなさまを、目にし、耳にしてよろこぶ古めかしい風習が、イギリスの一般庶民の間にまだ根深く残っているようである。

6月の終りには、Wimbledon Tennis Championships、7月に入ると、Henley Regatta が行われる。この月はまたイギリスの国技ともいうべき cricket の season でもある。

8月に入ると、the season も終り、社交界は London を離れる。中流以下でも金とひまにことかかぬ連中は sea-side resorts に出かけたり、イギリスに普及している motor coaches を予約して、国内やヨーロッパ旅行に出かける。8, 9月は旅行のシーズンなのである。

イギリスの学校は7月から9月にかけて約3ケ月にわたる the long vacation (夏季休暇)に入る。近年イギリスのいくつかの大学は、学生たちの出はらったこの期間を利用して学内を開放し、主に海外の学生を目あてにした summer shool (夏季大学)を開くようになった。私は1954年の Oxford の course に参加して、7月はじめから8月半ばまでをこの学園都市にすごした。涼しくて静かな寮内に寝起きしながらの、勉強と聴講と見学の6週間は、まことに楽しいものであったが、一番思い出にのこるのは、余暇をほっつきあるいて親しんだ Oxford の近郊の自然である。Matthew Arnold が 'Thyrsis' や 'The Scholar-Gipsy' の中で触れている数々の箇所は百年をへだてた今も、やはり魅力にとんだ好適の散策地である。ことに南郊 Boar's Hill からの、真夏の青い空と緑の野に照りはえる "That sweet city with her dreaming spires" の遠望はすばらしかった。大学の建物群といい、それをめぐる自然といい、これらの美しくゆかしい環境は、この国の人々の、幾世紀にもわたる、この学問の場への愛と、英知と、努力によってきずかれ、たもたれて来たことを思って、感慨深いものがあった。

ニュー・イングランドの夏

橋口　稔

ニュー・イングランドの夏は、いつ来ていつ終るのだろうか。

ここでは、きびしく長い冬がいつまでも立ち去ろうとしないから、春の訪れは大そう遠慮がちで、人々はなかなか明るい開放的な気分になれない。5月になっても、まだ冷たい風が肌身にしみる日もあって、室内は暖房から抜けだせない。

それがある日、5月も中旬から下旬に入るころ、やっとつよく明るい日差が街にあふれて、新しい季節の到来を告げる。幌をたたんだオープン・カーが走る。チャールズ川には点々と白いヨットの帆がすべり、水辺には待ちかねたようにビキニ姿をさらす若い女性もいる。

こうなれば、もう新緑のもえあがるのは、ちょうど秋に黄葉が街をつつみ林を染めるのが慌しく激しかったのと同じように、あっという間である。若葉かと見まがう花を咲かせていた街路樹のメイプルは、見る見るうちに葉を大きくして、木陰をつくって行く。そして、ライラックが咲く。

先生も学生もみんな明るい陽光に足をはやめて、何となく落着かなくなる。それぞれ故郷に、ヨーロッパに、高原や海の別荘に、あるいはよその大学のサマー・スクール

に、出かける計画をもってその準備に忙しいのだろう。夏は、ここケンブリッジの町では、まさに夏休みとともに始まるのだ。

6月の中旬に行われる卒業式を待たないで、ケンブリッジからいなくなってしまう人も多い。あるプロフェッサーは「卒業式になんて出たことがない」と言った。

それでもやはり、ハーヴァードの卒業式は、ケンブリッジの夏がもつ最大のお祭りである。その日が近づくと、街にはお揃いのカンカン帽をかぶった紳士たちや、胸に名札をつけた老人たちが目につき始める。同窓生たちが集って来ているのだ。

式は、ハーヴァード・ヤードの中心部、チャペルと図書館にはさまれた野外劇場で行われる。雨の時にはどうするのか知らないが、大学の人たちの言うには「卒業式の日にはゼッタイ雨は降らない」のだそうである。

黒いガウンと総の垂れた四角い帽子にあふれた卒業式そのものは午前中に終って、午後は同窓生の大会が開かれる。同窓生たちが各クラス毎にグループをつくって入場して来て席につくのだが、カンカン帽の一団は、とくに人目を惹く。大会のハイライトは、各クラスがこの1年にあつめた寄付金の報告である。金額が読みあげられる時、手をたたき歓声をあげるクラスもある。そんな最中に「降らない」はずの雨がしばらくぱらついて、木陰に雨を避ける人たちもいた。

卒業式が終ってしまうと、いよいよほんとうの夏である。気温は華氏で80度を越えることもあって、かなり暑い。それでも、湿度が低いから、はるかに凌ぎやすかったことを、今私は2年ぶりに日本の夏を経験しながら、身にしみて感じている。

6月から7月にかけてひと月たらず、ボストン・ポップスがチャールズ河畔で野外演奏会をひらく。人々はてんでに毛布や折畳みイスを用意して、夕涼みに出かけて行く。アーサー・フィードラーの指揮することは少いし、一流のメンバーは出ていないが、芝生に坐ったり寝そべったりして、星空をあおぎ、川風に吹かれながら、のんびり音楽をたのしむ。

折を見てはボストン近辺の海に出かけて行ったものである。ハイウェイには、トレイラーやモーターボートを後ろにつけて牽いて行く自動車が多い。南へ1時間ほどのナンタスケット。エリオット家の別荘のあったケイプ・アン。少し遠いがケイプ・コッド。しかし、どこの海でも、かなり南のはずのケイプ・コッドでさえ、水が冷たくてとうとう泳ぐことはできなかった。たいていの人が、浜辺で身体を焼くために来ているので、水につかっているのは、子供たちと少数の若者たちだけである。ケイプ・アンの水など、足をつけただけで痛いくらい冷たかった。

ナンタスケットでは、そのかわり大小さまざまのクラムを潮干狩して来て、砂を吐かせ、ゆでて食べたが、なかなかおいしかった。クラム・チャウダーの名は日本にも聞えていようが、ボストンのあるレストランでは、ロブスターや、生まのオイスターやチェ

リー・ストーンとともに、スティームド・クラムも売物のひとつになっている。

ケイプ・アンでは、小さな舟がロブスター・ポットをたぐりあげては、獲物をしらべていた。波止場にも、木で作った目のあらい檻のようなポットが、積みあげられていたりした。この岬のことを、エリオットが「ドライ・サルヴェイジズ」で歌っているのは、今更言うまでもあるまい。

暑さは7月が一ばんきびしく、8月になると、朝晩は涼しい風が吹いて何となく秋めいてくる。私の印象では、6月のほうが8月より暑かったように思えるが、それは長い冬と余りに短い春のあとに来た夏が、格別に暑く感じられただけのことかも知れない。

9月になれば、ぼつぼつ新しい学期のために戻って来る人もあるし、新来の人もいて、何となく町がさわがしくなる。ケンブリッジの夏は、夏休みの終るとともに終るのだ。

まだまだ暑い日もあるが、いっぽう夜には暖房の欲しいような、いや必要な日もあるようになる。ニュー・イングランドの夏は、結局、暖房のまったくいらない季節だということになろうか。

アメリカ南部の夏

中村順一

南部の夏は相当暑い。大学の卒業式はたいてい6月の初めだが、そのときの cap and gown を着ての行列はかなり暑い。しかし、やはり張りつめた気持である。この行事が終わると campus の表情も変わって来る。しばらくすると夏学期が始まるが、学生は大低新しくやって来る人達で、年齢も平均すれば高いようである。また教授の交流もある。

卒業して行く人達は多くが就職をする。また結婚式も多い。"June bride" という表現があるくらいである。ひじょうに動きの多い季節である。7, 8月といっそう暑くなると、勤め人が休暇をとるようになり、motoring が盛んになる。動く事はアメリカ人の性にあっているようである。国は広いし、いい道が出来ている。Steinbeck の *Travels with Charlie* にもこんな気分が感じられる。

私の数年を過ごした North Carolina 州で motorists のよく訪れる場所のひとつは、州の東端で、細い砂地の堤をへだてて直ぐに大西洋につながる Roanoke Island の Manteo にある "The Lost Colony" である。ここは、アメリカの最初の集団・定着した植民地としてやはり motorists のよく訪れる Virginia の Jamestown 植民よりも20年ばかり前の、いわば植民の歴史以前の物語の場所で、夏にはいつもこの「失われた植民地」の pageant が行なわれ、アルバイトとして出演する学生達がインディアンになるために、太陽に皮膚をこがしたりする話を聞いた。

North Carolina では州の「西端から東端へ」と言う場合に、上記の Manteo を東端と

し“from Murphy to Manteo”と言うが、Murphyは州の西部でかなり高いThe Great Smoky Mountatinsの中にある小さな町である。このあたりはいわゆるnational parkの一部で、木々と岩や水の美しい涼しい場所で、多少ゆとりのある人達の好んで夏を過ごす場所である。しかし、贅沢でなく、自然の中で家族を中心にして静かに楽しむといった人が多い。

この地方の中心地Ashvilleは Thomas Wolfeの育った町で*Look Homeward, Angel*に描かれている彼の住んだ家も記念館として残っている。この町の墓地で彼の墓をさがしていると、O. Henryの墓の方が先に見付かった。彼も晩年をこの土地で過ごした事を思い出した。

ここで数名の老婦人に紹介された。夏はこの土地で、冬は暖いFloridaで過ごしている人達であった。金はあって、もう別にする事のない人達らしかった。金の余っている老婦人。アメリカにはいろいろな人がいる。

若い人達のためには涼しい自然の中でcamp等が行なわれる。Tennessee州の高原で楽しく歌ったり踊ったりしたのを思い出す。こんな事が実に自然で上手である。比較的に金銭上のゆとりのない人達といっしょだった。こういう人達の中に働きながら学校に通って、世に出て行く人達も相当ある。

水を求めて湖や海に出かける人も多い。自動車に小さなボートを積んで走っている人の数が増して来たように思われる。海辺は賑やかでsea foodという看板をあげて魚や貝の料理を提供する店がある。

遠くまで出かけないでも、芝生の上で夕食をするのも夏の夕方の気持のいい習慣である。こんな事がよく出来るのも男や子供達が気軽に手伝いをするからだと思う。またoutdoor cookingといって庭でsteakを焼いたりする。実に楽しい事である。こんなときにいわゆる“Southern hospitality”が思い出される。また自分の家でなくても、公園や景色のいい場所で、家族が簡単に料理をしたり、ピクニックランチを食べたりする事が出来るような設備があちらこちらにある。

文学の作品を読んで心の中に描くある土地のimageが、実際にその場所を訪れた場合に、だいたい合致する場合とそうでない場合がある。*Huckleberry Finn*を繰返し読んでミシシッピ河を見る事にひじょうに大きな期待を持っていたが、下流のBaton Rongeで見た場合も、中流のDubuqueの場合も、人間の力の統御の下におかれた大きな濁流でHuckとJimの筏(いかだ)やカヌーに乗った牧歌的な感じは全然なかった。場所が違ったであろうし、時代が多いに違っていたせいであろう。私の通ったMissouri州は私の感じていたよりももっと明るい、美しい所であった。しかし、河口のNew Orleansは私のimageに近いものであった。あそこはHearnが若い日に苦闘をした場所で、彼の生活の背景を求めて訪れたのであった。Faulknerがあそこの生活を楽しんだ事を語ってくれたが、そのNew Orleansは時代的にもほとんど同じものを見たので、これは自然に理解出来た。Faulknerといえば、森の中に残された崩れかかった家を見て*Sanc-*

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

tuary や *Light in August* の中の家を思い起こしたものであった。

南部の生活を考える場合には黒人の事を考えないわけには行かない。これまでに述べて来た事柄も、もし黒人の側に視点を移して行けば、ガラリと変わって来る。ことに King 師の暗殺以来緊張が続いている。南部の代表的な大学である Duke 大学(どちらかと言うと保守的)でもこの事件に引続いて“vigil”と称して学生が campus に立籠り、黒人の待遇改善を要求して、学長の吊し上げをしたりした。

これと同時にヴェトナム戦争の重圧があり、雰囲気が変わって来ているらしい。親しい友達からの手紙に“people are so self-centered now”ともあった。もちろん、これが全体的な姿だと速断してはならないが、変化が起こっている事は事実であろう。空一面を赤くあるいは金色に染めた夕映は今も美しく、Alabama や Texas の海の近くで見た夾竹桃の並木も、人々の善意も変わっていないであろうと信じるが。

日本の夏

山本健吉

日本の夏は、立夏(5月6日ごろ)から立秋(8月8日ごろ)の前日までである。月で言えば、だいたい陰暦4、5、6月、陽暦では5、6、7月だ。これは暦の上でそうなのであり、俳諧歳時記はそれに従っている。

だがこれは、現代人の生活感覚から言えば、少しずれている。一般の生活者にとっては、8月はまだ暑い盛りである。イギリスの夏は、実際には5月半ばから8月下旬までだとあるが(29ページ)、日本でもほぼこれと変らない。ただしイギリスでは、夏は1年のうちでも最も快適な季節というが(同)、日本では暑い季節であり、湿度の高い日本では、夏の不快指数は高い。

日本人は昔から、四季のなかで春と秋とを快適な時期と考えた。季の詞に、「行く春」「行く秋」とは言うが、「行く夏」「行く冬」とは言わない。それは春と秋だけが、その過ぎ去って行くのを惜しむに価したからである。「三月盡」「九月盡」という言葉があって、「六月盡」「十二月盡」などと言わないのも、旧暦の3月、9月がそれぞれ春と秋の終りの月であり、その三十日(みそか)には過ぎ行く季節への特別の感慨があるからだ。また「春惜しむ」「秋惜しむ」と言って、「夏惜しむ」と言わなかったのも、同じことだ。ただし冬の終りは年の終りでもあったから、行く年を惜しむ意味で、「冬惜しむ」とは言った。

だが、こういうことも、今の若者には通じないかも知れない。海に山に、行楽のシーズンである夏は、若者たちには十分惜しむに価するし、長い夏休みが終るということも、惜別の思いをそそるであろう。スキーを楽しむ人にとって、冬が惜しむに価することは言うまでもない。

「避暑」という言葉がある。山に海に暑を避けることだが、現代の感覚で言えば、避

けるという消極的なものでなく、むしろ積極的に夏の楽しみを、山や海へ求めに行くのである。軽井沢はまだ避暑地という感覚があるが、上高地になると、すぐ眼の前に穂高その他を控えているせいもあって、もっと積極的な感覚がある。

日本の夏の特色は、何といっても長い雨期、つまり梅雨期があることだろう。気象学者は日本の夏を、気象変化の上から梅雨期と盛夏期とに分けている。4月の「春雨」と6月の「五月雨」とに挟まれた5月も、霖雨性の雨が降って、「卯の花くたし」という言葉が古くから歌に使われ、また「筍(たけのこ)ながし」「茅花(つばな)ながし」などとも言う。「ながし」というのは多く南風に言い、雨を伴うのである。「卯の花くたし」は生活語ではなく、歌言葉の誤解から生れた熟語だが、「筍ながし」や「茅花ながし」は、それぞれ地方の人たちの生活感覚が息づいている。言葉は机上で作った言葉より、土の香や生活者の息吹の感じられる言葉の方が、美しくもあり、生命的でもある。

私は「青葉潮」「青山潮」という言葉に、感心したことがある。初夏のころ、太平洋岸に黒潮がさしこんでくるころの季語で、漁村の人たちが言い出したことだ。ちょうど青葉若葉が山々に美しく映えるころで、カツオその他の魚たちは、海に映る山の緑を慕って来るのだと考えて、こういう言葉を作ったのだ。これは如何にも、父祖から伝承された生活感覚にあふれている。戦後濫伐の結果、緑の山が禿山になって、海の魚が寄りつかなくなったと言っているという。それが科学的に根拠がないとしても、私は彼等の生活の知恵を信じたいのである。「青葉潮」などと風流気からつけたのではなく、それは単純にまた端的に、黒潮の訪れとともに海の水が復活して豊かな海の幸をもたらすことを讃える、生活の歓びの表現だったのである。

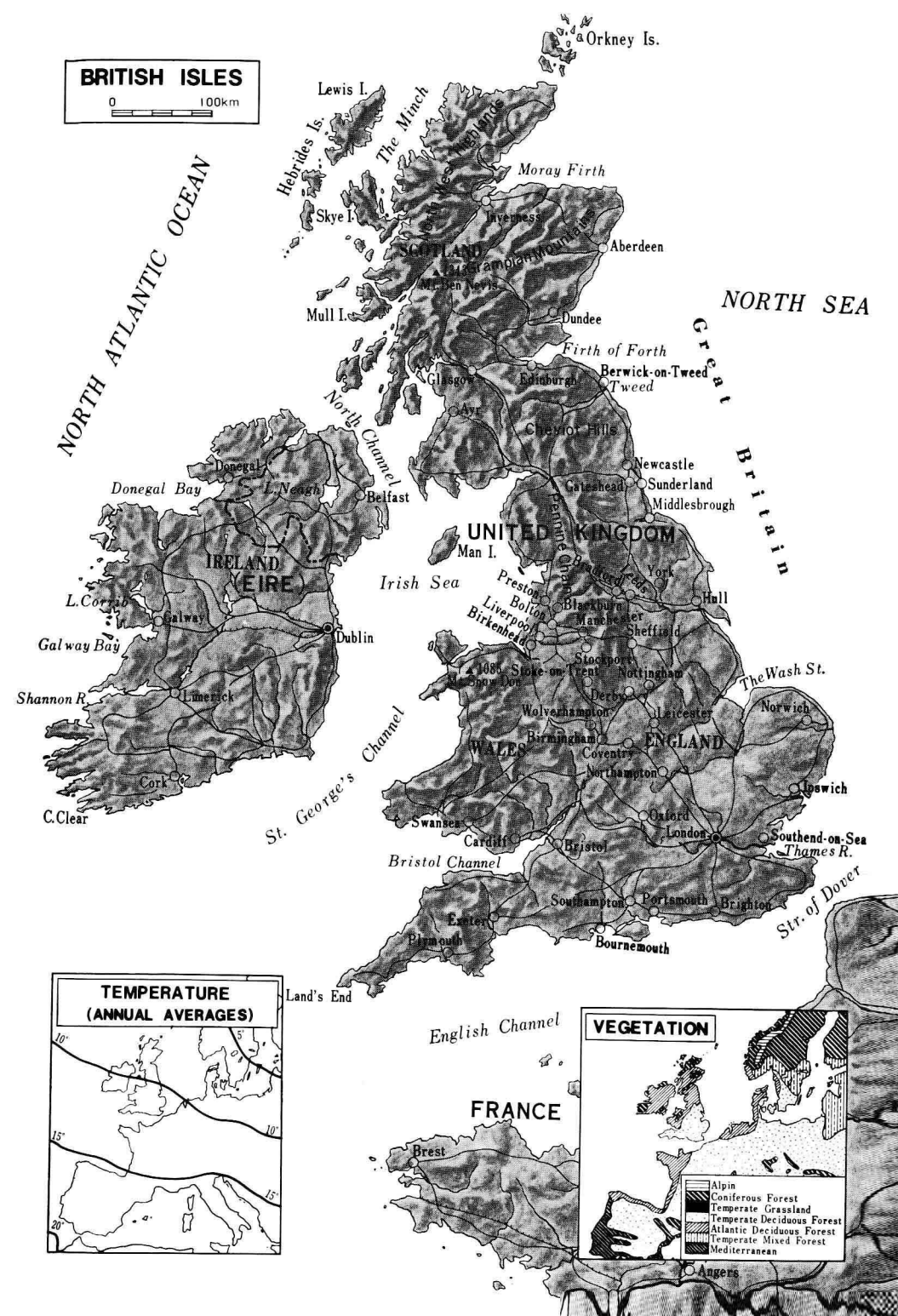
夏至はもっとも日が長く、夜が短い。midsummer はこのころに当る。だから「短夜」というのは、夏の季語になっている。そんなら「日永」も夏である理窟だが、これは春である。同じことは、「夜長」が秋、「短日」が冬という約束にも見えている。

季節の感情は理窟通りには行かない。理窟から言えば、「日永」と「短夜」とは夏であり、「夜長」と「短日」とは冬である。だが、日本人の古来の美意識は、これを四季に配分した。すでに万葉時代から、「霞立つ長き春日」「ほととぎす来鳴く五月(さつき)の短夜」などと言っているのだから、それは美意識である前に、古代人の生活感覚だったのである。その感覚を今日の俳句でも、そのまま継承しているのだ。

春の「暖か」、夏の「暑さ」、冬の「寒さ」は、だいたい日本列島の客観的に妥当な季感である。そんなら「涼し」は秋がよかろうと思えるのだが、これは夏の季語である。夏はひとが、涼しさをもっとも欲する季節だからで、これだけが主観的な約束なのだ。だが、ひとは冬もっとも暖かさを欲するからと言って、「暖か」を冬の季語とはしない。ほんのちょっとした涼味——そよ風や、扇の風や、緑の樹陰であっても——ひとは涼しさをはっきり感ずることができる。涼しさに対する欲求が強いからである。「涼み」とか「滝」とか「泉」とか、涼味に関する言葉は、すべて夏に集中する。秋の涼しさは、「新涼」「初涼」などと、とくべつに区別して言う。

客観的な科学性だけが、季語を決定するのではない。主観的な欲求や願望や情緒や美意識なども、季を決定する要因として働く。

「夜の秋」という言葉がある。江戸時代には「秋の夜」の意味で使っていたが、明治の終りか大正の初めごろ、夏の季語に使い出した。私はこの季語の決定に、感心する。「土用なかばに秋の風」と、昔から言っている。夏の終りの夜ごろに、吹く微風にも、あるいは虫の音にも、近寄る秋を感じることがある。べつに気温の上で秋だというのでなく、何とない気分の上でのことである。だから気象学者が、夜の気温が下りはじめる立秋以降に、この季語を用いた方が合理的だというのは、理窟の上のことである。理窟を超えたところに、日本人の季節感情は鋭敏さを発揮するものらしい。


BRITISH ISLES
0
100km
Orkney Is.
Lewis I.
Hebrides Is.
The Minch
Moray Firth
Skye I.
Inverness
SCOTLAND
Aberdeen
Mt. Ben Nevis
Mull I.
Dundee
NORTH SEA
NORTH ATLANTIC OCEAN
Firth of Forth
Great Britain
Glasgow
Edinburgh
Berwick-on-Tweed
Tweed
North Channel
Ayr
Cheviot Hills
Newcastle
Sunderland
Gateshead
Middlesbrough
Donegal
Donegal Bay
L. Neagh
Belfast
UNITED KINGDOM
Man I.
IRELAND
(EIRE)
Irish Sea
Pennine Chain
Bradford
York
Preston
Blackburn
Hull
L. Corrib
Bolton
Liverpool
Manchester
Sheffield
Galway
Dublin
Galway Bay
Birkenhead
Stockport
Stoke-on-Trent
Nottingham
The Wash St.
Shannon R.
Limerick
Derby
Norwich
Wolverhampton
Leicester
St. George's Channel
Birmingham
ENGLAND
WALES
Coventry
Cork
Northampton
Ipswich
C. Clear
Oxford
Swansea
London
Southend-on-Sea
Cardiff
Bristol
Thames R.
Bristol Channel
Str. of Dover
Southampton
Portsmouth
Brighton
Exeter
Plymouth
Bournemouth
Land's End
English Channel
FRANCE
Brest
Angers
TEMPERATURE
(ANNUAL AVERAGES)
5°
10°
15°
20°
VEGETATION
Alpin
Coniferous Forest
Temperate Grassland
Temperate Deciduous Forest
Atlantic Deciduous Forest
Temperate Mixed Forest
Mediterranean

THE UNITED STATES OF AMERICA
0
1000km
ARCTIC OCEAN
Ellesmere I.
GREENLAND
ICELAND
Reykjavik
Denmark Str.
Parry Is.
Melville I.
Banks I.
Devon I.
Victoria I.
Baffin I.
Davis Str.
Yukon R.
ALASKA
Kodiak I.
Great Bear L.
Melville Pen.
Hudson Str.
Southampton I.
Great Slave L.
Hudson Bay
Labrador Pen.
Newfoundland Is.
Queen Charlotte Is.
CANADA
Rocky Mountains
Edmonton
Nelson R.
Vancouver I.
Vancouver
Calgary
Winnipeg L.
Seattle
Columbia R.
Winnipeg
Superior L.
Huron L.
Ottawa
Montreal
St. Lawrence R.
Missouri R.
St. Paul
Michigan L.
Milwaukee
Detroit
Toronto
Buffalo
Boston
Cleveland
New York
Philadelphia
Baltimore
Washington
Pittsburgh
Erie L.
Chicago
PACIFIC OCEAN
San Francisco
Salt Lake City
Nevada
Sierra Nev.
THE UNITED STATES OF AMERICA
Denver
St. Louis
Cincinnati
Appalachian Mountains
ATLANTIC OCEAN
Los Angeles
San Diego
Arkansas R.
California Pen.
El Paso
Dallas
Jacksonville
Houston
New Orleans
Florida Pen.
MEXICO
San Antonio
Mississippi R.
Gulf of Mexico
Bahama Is.
Miami
West Indies Is.
Rio Grande R.
Monterrey
Str. of Florida
Havana
Cuba I.
DOMINICA
Haiti I.
Yucatan Pen.
CUBA
Mexico City
Popocatepetl
Guatemala
GUATEMALA
San Salvador
EL SALVADOR
Tegucigalpa
Tundra
Alpine
Boreal Forest
Temperate Forest
Temperate hygrophytic or mesophytic Forest
Warm temperate, hygrophytic or mesophytic Forest
Mediterranean
Xerophytic or desert tropical scrub
Temperate desert
Grass Land
VEGETATION
TEMPERATURE (ANNUAL AVERAGES)

彩色図版

夏 . . . . . 口絵
鳥 (1) . . . . . 対 190
鳥 (2) . . . . . 対 222
は虫類その他 . . . . . 対 254
花 (1) . . . . . 対 318
花 (2) . . . . . 対 350
樹木 . . . . . 対 398

地図

イギリス (British Isles)
アメリカ (U.S.A.)

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com